

可視化を用いた自己決定支援の手法と意義

～対人援助シーンでのグラフィック・ファシリテーション活用の事例から～

Methods and significance of self-determination support using visualization

企画・話題提供者：奥野美里（株式会社コクリエ）

Misato Okuno（Cocrea Co., Ltd.）

討論者：松尾智晶（京都産業大学准教授）

Chiaki Matsuo（Associate Professor, Kyoto Sangyo University）

Key words: ヴィジュアルナラティブ, キャリア支援, 社会構成主義

まちづくりやオープンイノベーション、組織開発などの現場で、話し合いを文字やイラスト、図解などで可視化しながら、対話や気づきを深めるグラフィック・ファシリテーションを生業とする企画者は、その手法の対人援助シーン、特に1on1のセッションやケース会議などでの活用について、実践研究を重ねている。

対人援助では、①苦しい現状を受け止め癒していくカウンセリングが適したフェーズと、②現状を踏まえて自身のライフやキャリアを切り開いていくキャリアコンサルティングやコーチングなどが適したフェーズがあると企画者は考える。しかし、いわゆる福祉としての対人援助では『バイステックの7原則』などを学んで従事した人ばかりではないということもあり、①に終始したり、障害者や病気の人の枠の中で生きることをあたりまえとする、あるいは当事者自身に生き方やキャリアを考える力がないと決めつけてしまうような、アンコンシャス・バイアスが生まれていないだろうか。

企画者は10余年前に子宮頸がんの手術を受け、その後遺症で下肢リンパ浮腫、慢性腎不全と共に生きている。一方で、それらの状況を踏まえてどう生きるか、働くかが、自分自身の大きな課題となった。何より、医療や福祉関係、あるいは身近な人からの「まだ働くの?」「まずは命が大事なのでは?」「無理をしないで」といったおそろく親切心から出たことばに傷ついた。社会から退場しろと言われているようで辛かったのだ。企画者自身は、その後、病気や障害について、ときには隠し、ときにはこっそり伝え、ときには公表するなど、相手との親密さや受容度を測りながら伝える度合いを調整し、私らしくどう生きるか、キャリアを積んでいくかを考え、実行してきた。その支えになったのが、可視化である。迷ったとき、グラフィック・ファシリテーション仲間に、自分の思いや考えを可視化してもらったことで、自分自身の感情に気づき、自己決定していくことができた実感している。

この経験をもとに、グラフィック・ファシリテーションを、対人援助職の人が忙しい中でも取り入れられるよう、できるだけシンプルに整理したものが、今回紹介す

る対人援助でのグラフィック・ファシリテーションである。ワークショップではほんの触りだけになってしまうが、実際に相談者役、相談員役を体験してもらうことで、①と②を地続きになるようなだらかにつなげ、地に足がついた形で未来や希望を考えていくために、そのための自己決定を支援していくために、グラフィック・ファシリテーションによる可視化の可能性を体感してもらえるのではないかと考えている。

ぜひ多くの対人援助職の方に参加いただき、この手法の可能性や限界について議論したい。

■ワークショップのプログラム

1. イントロダクション、主旨説明
2. 対人援助でのグラフィック・ファシリテーション活用についてのプチレクチャー①
 - ・活用シーン
 - ・なぜ機能するのか?
 - ・実践のポイント
3. 実践! 1on1セッション
 - ・相談者役（話す人）と相談員役（聞いて描く人）となつてのペアワークを体験
4. 感想シェア
5. 対人援助でのグラフィック・ファシリテーション活用についてのプチレクチャー②
 - ・自己決定支援へとつなぐためのポイント
6. 視点提供：松尾智晶氏
 - ・キャリア開発・キャリアコンサルティングの視点から
7. ディスカッション/Q&A
8. リフレクション、終了

ディスカッションの内容についても、当日、グラフィック・ファシリテーションを用いて可視化し、ケースワークなど複数人での話し合いのイメージも共有できるよう工夫する。

可視化に可能性を感じた方、ぜひ体感したうえで、共に議論していただければ嬉しいです。